

## 令和6年度 第1回ゼニガタアザラシ科学委員会

### 議事要旨

日時：令和6年6月10日(月) 10:00~12:00

会場：TKP 札幌駅カンファレンスセンター カンファレンスルーム 3F

#### 議事1：令和6年度（2024年度）環境省えりも地域ゼニガタアザラシ管理事業実施計画及び事業の進捗状況について（報告）

- ・事務局より、令和5年度事業実施結果及び評価について、令和5年度の協議会において報告できなかった部分および、資料1「令和6年度事業実施計画」に基づいて令和6年度の事業実施状況の報告を行った。
- ・発表資料（資料提供なし）に基づき、小林委員から令和5年度のモニタリング調査の補足説明をいただいた。

#### 【主な意見】

- ・ 被害割合が減少した要因は必ずしも被害防除の成果とは言えないということか。
  - ⇒ その通りである。
- ・ ドローン調査が軌道に乗ってきて、資源評価や管理に役立つ形になったのは大きな進歩だと思う。ドローンから撮影した画像で当歳獣の識別が可能になったとのことだが、精度はどうか。
  - ⇒ 春は明らかに当歳獣だとわかるが、秋になると判別が難しい場合があるため、現在は春に撮影した画像のみを使用している。
  - ⇒ 空撮画像で正確に春の当歳獣と当歳獣以外の数がわかるのであれば、解析の基準は満たしていると思う。
- ・ 目視調査の結果とドローン調査の結果を比較しているが、最大上陸頭数の観測日は目視調査とドローン調査で違うのか。また、ドローン調査と目視調査での当歳獣の確認個体数の比較は行っていないのか。
  - ⇒ 最大上陸頭数の観測日は目視調査とドローン調査で異なった。また、ドローン調査では当歳獣の個体数ではなく全体の個体数をカウントしている。そのため、当歳獣については目視調査とドローン調査とで確認個体数の比較は行っていない。
- ・ ドローン調査での確認個体数が目視調査に比べて少ない日があるが、目視調査での確認個体数が最大の日にドローン調査は行っていないのか。
  - ⇒ 行っていない。2023年度は飛行できる気象条件の日が少なく、ドローンでの調査回数が少なくなった。さらに、学生が実施している目視調査ではカウント可能だがドローン調査を行うことが出来ない気象条件なことが多く、結果として、目視調査での確認個体数が多かったタイミングでドローン調査を実施できなかった。ドローン調査の結果は情報源として重要なので、来年度以降、調査機会を増やす

ことができないか検討したい。(事務局)

- 確認個体数については最大値の使用が適切かどうか議論が必要だと思う。調査結果が天候にも左右されるのであれば、目視調査時の天候情報も必要だと考える。これらを検討し、それに伴う調査設計を行う必要があると感じる。

#### 【今後の方針】

- ドローンによる上陸個体数の調査の実施体制について検討する。
- 調査結果に影響を与える情報に応じた調査設計について検討する。

#### 議事2：えりも地域ゼニガタアザラシ特定希少鳥獣管理計画（第3期）（案）について

- 資料2「次期管理計画（第3期）」および参考資料2「令和6年度ゼニガタアザラシ関係会議スケジュール」に基づいて、事務局から説明を行った。
- 発表資料（資料提供なし）に基づき、委員から第3期管理計画目標の伏字部分を中心に説明をいただいた。

#### 【主な意見】

- 挙げられた論点を精査すると、大幅な変更となり、本日中に管理計画案は完成しないのではないかと思う。本日中にパブリックコメントにかける管理計画案をほぼ完成させるという認識でよいか。
  - ⇒ その通りである。本日中に完成しなかった場合は後日メール等で議論できればと思う。(事務局)
- 事務局としては、管理計画上には個体群管理の基本となる考え方を記載するにとどめ、具体的な数値目標は実施計画に記載することで、データの更新に伴って柔軟に捕獲数の設定を見直せるような方法も考えている。(事務局)
  - ⇒ 反対である。個体群の管理基準が環境収容力である場合、管理計画に具体的な目標が書かれていないことで混乱を生む恐れがある。
  - ⇒ 今回の提案は具体的な数値目標を書かないということではない。個体数調整が順調であると仮定すると、管理基準を環境収容力に対する割合ではなく、現状の個体数の維持とできるのではないかという提案である。
  - ⇒ 数値目標の参照基準を環境収容力から変更するというのであれば、管理計画全体の考え方を変えるということになるので、明確に示すべきであると思う。
- 個体群管理の目標を現状維持とした場合、今以上に減らすことができないという意味になる。そのことについて地域の合意が得ることが問題になると思う。
  - ⇒ 現場の被害感情も含めて、調整することはあって良いと思う。協議会で意見をいただくべき部分でもあるので、含みを持たせるような書き方をしておくと、実務上柔軟な対応を行いやすいのではないか。
- 捕獲頭数の上限について具体的なイメージが持てない。

- ⇒ 今回用いたパラメータの精査を行って、個体群動態のシナリオが絞り込めれば可能である。しかし、シナリオが何通りか出た際に、上限を保守的な値とするか平均のような値とするかは作業部会等で議論しなければならないと考える。
- ⇒ シミュレーションによって捕獲頭数の上限がごく少ない値となった場合に地域の合意が得られるか心配である。
- アザラシによる漁業被害が減っている中で、被害対策として捕獲することについて社会的な合意を得る必要があると考える。漁業被害が減っているという実感はあるか。
  - ⇒ アザラシによる被害は減っている。しかし、漁獲量も大きく減少している中で捕獲頭数が現状よりも制限されることには違和感がある。
  - ⇒ 被害の減少の要因は何か
  - ⇒ 格子網の装着などの被害対策によって来遊個体数の減少や執着個体の減少などの影響があると考えている。
- 際限なく個体数を減らせるわけではないので、どこかに歯止めが必要である。被害対策をしながら、個体群の維持との両立を図るという書き方ができるか、というところを考えていきたい。

#### 【今後の方針】

- パブリックコメントにかける第3期ゼニガタアザラシ管理計画案については目標部分の記載内容について事務局で再度検討し、専門委員の意見を募る。

### 議事3：その他

#### 【主な意見】

- ステータスレポート案を作成した。自身が担当する箇所の確認をお願いしたい。私が担当する、ドローンの目視調査の上陸個体数のトレンドについて、誰のデータをどのように入れ込むか皆さんに確認したい
- 直近の推定個体数は何頭か？
  - ⇒ 頭数では示していないが、2016年を基準として7割程度の個体数になっていると推測される。
- アザラシはマダコを多く捕食しているとのことだったが、地域全体でどのくらいの量を消費しているか推定できるか。
  - ⇒ 食性については春と秋の情報しかないので、年間通じてのマダコの消費量は算出していない。
- 保全も含めた資源管理という点では、強くは言えないが1つの成功という認識があっても良いと感じる。一方で、赤潮や、漁業資源の来遊パターンの変化などもあるので、これまでと同じ感覚で管理を進めていいのかと問われると少し疑問である。
- ゼニガタアザラシは漁業資源を捕食するという意味では負の要素があるが、ゼニガタア

ザラシが生息することにより生態系に果たす役割もあると思う。個体数調整を行う際に、漁業被害という観点だけからではなく、えりもの生態系を幅広く守るという観点も今後検討していく必要があると思う。

- 今後、環境収容力を引き合いに出さないというのは大きな意味を持つことだと思う。どういう形で管理計画を書くにせよ、それが今後5年間のスタンダードになっていく。5年の間に、できるだけ判断の根拠を明らかにするというのは我々科学委員会の仕事である。
- えりも地域の漁業の問題解決は環境省のゼニガタアザラシ対策が主だというふうになってしまうと、様々な他の要因に目が向けられなくなる懸念がある。環境省が全ての課題解決を請け負えることはないので、課題の一つ一つに対して誰がどのように対応していくのかということについて、考えていかなければならないと思う。

#### **【今後の方針】**

- 科学委員会の成果物としてステータスレポートの完成を目指す。